

文楽豆知識

【足拍子】あしびょうし

人形で、登場人物が走ったり歩いたりするさまを表現したり、何かの型をするとき、決まりの形を強調するために踏む拍子のこと。足遣いの担当。

【掛け合い】かけあい

義太夫節では、原則として一人の太夫が、一段すべてを語るが、掛け合いは、人形の役にあわせて数人の太夫で演奏する方式。

【切り場】きりば

一段の浄瑠璃のうちクライマックスの部分。各段の最後にあり、その段の中核に当たる重要場面。単に切りとも。

【切り場語り】きりばがたり

切り場を語る技量のある者で、番付の名前の上に、「切」の字を許された太夫。同じ切り場を語っても、「切」の字を許されていない太夫は「奥」「後」などと書かれる。

【景事】けいじ

舞踊劇や、心中物の道行など、舞踊の要素のつよいものをいう。「けいじ」ともいう。

【口上】こうじょう

場面のvari目ごとに、そこを語る太夫と三味線弾きの紹介を行う。これは人形遣いの役目。黒衣に身を包んだまま舞台上手に現れ、独特の節まわしで、太夫と三味線弾きの名前を告げ、人形の出遣いや早代わりがあるときは、それも併せて観客に知らせる。

【サワリ】

義太夫節以外の他流の曲節を流用する(障る)節。転じて一段中のもっとも重要な聞かせどころ、とくに女性の心情を吐露した場面などをさす。「くどき」ともいう。

【素浄瑠璃】すじょうるり

人形をいれず、太夫と三味線だけの演奏をさす。

【時代物】じだいもの

浄瑠璃全体の時代設定が、江戸時代より古く、原則として公家や武士の社会での出来事を扱った作品のこと。

【世話物】せわもの

江戸時代の町人の生活や風俗を背景に、庶民の事件、恋、人情のもつれ・争いを描いた作品のこと。

【大団円】だいだんえん

五段組織で出来ている時代物の最終五段目で、通常は、ほとんど上演されることがない。

【チャリ場】

文楽の演目の中で、観客の笑いを誘うような滑稽な場面をさす。

【ツメ人形】

捕り手、家来、通行人、腰元、官女など、その他大勢の役に使われる一人遣いの人形。番付では遣い手の名を記さずに、「大ぜい」と書かれる。

【出遣い】でづかい

文楽では一体の人形を三人で操るが、そのうちの一つ中心となる主遣いが、頭巾をかぶらず、顔を出して舞台へ登場するやり方。現在では、原則的に切り場はほとんど出遣いであり、主遣いの衣装は紋付と袴になる。

【通し狂言】

時代物を発端から大詰めまで、若干のカットはやむを得ないとしても、通して上演すること。

【端場】はば

浄瑠璃の各段のはじめの部分。戯曲の導入部をいう。切り場で展開されるドラマの仕込みの段階で、事件の背景や登場人物などを、概略的に紹介する。番付の名前の上に、口、中、次と書かれる。

【番付】ばんづけ

上演する外題、出演者、配役などが書かれた印刷物。文字の大小、書かれる場所により、出演者の格や地位などが示される。

【道行】みちゆき

人形浄瑠璃の重要な見せ場の一つ。登場人物が目的地へたどり着くまでの行程を見せる場面で、通常は複数の太夫と三味線弾きで花やかに演奏される。

【床】ゆか

文楽で義太夫節を演奏するための、客席右手前方に張り出した舞台。回転式の盆の上に乗って太夫、三味線弾きが登場し、口上の後、演奏をはじめめる。